



学長挨拶

知を実践する大学を目指して

鳥取大学長 能 勢 隆 之

国立大学法人鳥取大学は、教育・研究の理念に「知と実践の融合」を掲げ、高等教育を行う大学の役割である人間形成、能力の開発、知識の伝授、知的生産活動、文明・文化の継承と発展などに関する学問を教育、研究するとともに知識のみに留めるのではなく、それを実践する場として位置づけています。

また、21世紀は新しい知識・情報技術が、政治・経済・文化をはじめ社会のあらゆる領域で飛躍的に重要性を増す、いわゆる「知識基盤社会」の時代と言われます。そのため本学は、基本目標として「21世紀を迎えて、大学は教育・研究・社会貢献・診療等の面で、大学が発揮すべき機能を十分に進展させる」と宣言しています。

鳥取大学は、昭和24年設置以来60年弱の歴史と伝統を持ち、37000余名の卒業生を輩出しています。現在4学部そしてそれぞれに修士・博士の大学院を設置し、各種の機能を持った20余のセンターや附属施設を置き、大学の理念の実現に努めています。

構成員として学部学生、大学院学生等6300名、教職員1600名の人材を擁し、医学部附属病院、農学部附属フィールドサイエンスセンター、附属菌類きのこ遺伝資源研究センター、附属動物病院、附属鳥由来人獣共通感染症疫学研究センター、附属小・中学校、全国共同利用施設の乾燥地研究センターなど地方大学の特性を活かし、広大で自然豊かなキャンパスを擁し、周辺には海あり、山あり、遺跡ありの静かで、ゆったりした環境で教育・研究・診療などを実践しています。

鳥取大学は個性輝く大学を目指し、地方大学にこそ求められる特徴あるオンリーワンの研究開発を行い、社会に役立てるとともに、国際競争力を確保し、地域社会及び産業等に貢献し、社会からの期待に添うことのできる大学づくりを目指しています。

特集にあたって

鳥取大学は、地域に立脚した大学，地域に密着した大学を目指しており，このことは国立大学法人となった現在，ますますそのための努力と変革を続けています。鳥取大学広報誌「風紋」の第11号では，最先端医学の世界レベルの拠点形成及び地域に密着した医療についての医学と医療の最前線，及び施設紹介では本年4月農学部を設置された「菌類きのこ遺伝資源研究センター」をご紹介します。鳥取大学から地域に世界に展開する様子の一端をご理解頂ければ誠に幸いです。

広報誌編集専門委員会委員長 福井 茂壽

21世紀COEプログラム 染色体工学技術開発の拠点形成

文部科学省 21世紀COEプログラム（2004～）
染色体工学技術開発の拠点形成

鳥取大学 大学院医学系研究科
機能再生医科学専攻 遺伝子機能工学
ホームページ www.med.tottori-u.ac.jp/21coe

21世紀COEプログラムとは

我が国の大学に世界最高水準の研究教育拠点を形成し，研究水準の向上と世界をリードする創造的な人材育成を図るため，重点的に支援を行って国際競争力のある個性的な大学づくりを推進するために文部科学省が平成14年に始めた事業です。鳥取大学の「染色体工学技術開発の拠点形成」プログラムは平成16年度に「革新的な学術分野」として採択され，平成14年度に本学で採択された「乾燥地科学プログラム」につづいて世界をリードする研究教育プログラムとして期待が寄せられています。

どのようなプログラムか

生命体に備わっている遺伝子の構造や働きの究明が進むにつれ，がんや遺伝病の治療，抗体医薬品の開発，再生医療な

どに新しい扉が開かれようとしています。鳥取大学では，その遺伝子やDNA（デオキシリボ核酸）の集合体である染色体を自由につなぎ変えるゲノム改変や，細胞融合の応用技術「染色体導入」の技術を確立してきました。これらを発展させて染色体レベルでの遺伝子機能の解析・遺伝子再生医療やバイオ産業への応用を目指し，染色体工学技術分野での世界最高水準の国際共同研究拠点づくりと国際貢献のできる人材養成を推進しているのが「染色体工学技術開発の拠点形成」プログラムです。

これまでプログラムのリーダーを務める押村光雄教授らが，がんや老化のメカニズム解明，遺伝病の原因遺伝子の解析，ヒト抗体を産出するマウスの開発などに取り組んでおり，「類のない技術・システムを開発し，革新的な研究分野を確立してきた」ことが選定につながったものと思われます。

21世紀COEプログラムで世界をリード！

ヒトゲノム（人間の遺伝子情報）の4種類の塩基（ATGC）配列こそ特定されましたが、このゲノム解読は、あくまで「出発点」でしかありません。DNAはそれぞれの位置関係によって正確に制御されているため、その集合体である染色体レベルでの研究がますます不可欠になってきています。その研究の先になが見えてくるのか。それは、まだ未知の世界ですが、染色体工学を学び深める過程では多種多様な分野にわたる革新技術を生み出す要素が散りばめられていることが確かだということが分かってきました。数年後には、病気の治療に役立つ遺伝子を細胞内へ安全に運ぶ「ヒト人工染色体ベクター」の実用化や、国際的な共同研究センター設立を目指して、日々、プログラムそのものが進化しています。



人工染色体

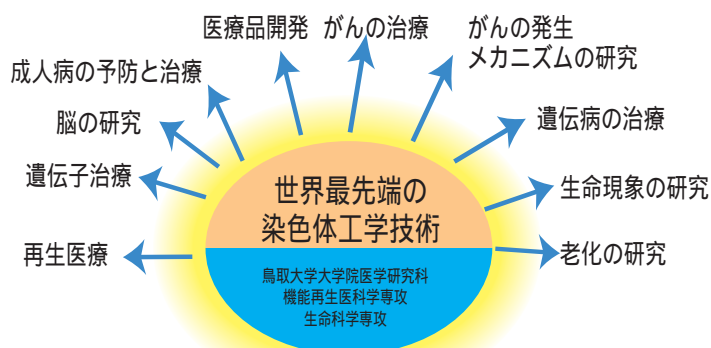
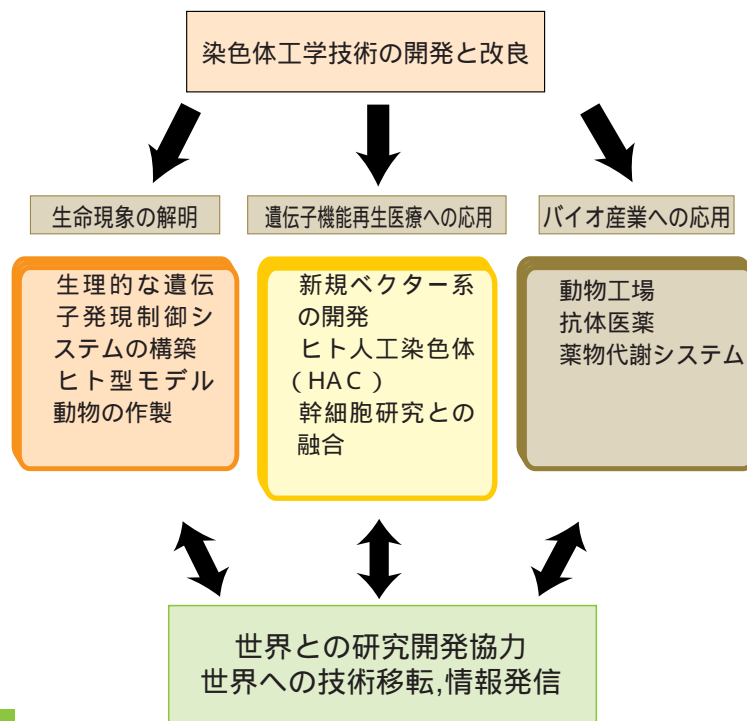
染色体とは

人間の体細胞にある46本の染色体にはそれぞれ、4種類の塩基が2つ1組で30億個数珠つなぎになったデオキシリボ核酸（DNA）が折り畳んでしまわれています。46本分をつなぎあわせると約1.8メートル。その内、体の組織を作ったり、活動を助けたりする様々なたんぱく質の設計図になっている部分が遺伝子で、DNAの5%、数は約3～5万個あるとされています。人間のDNAの解読が終了した現在、配列が持つ意味の解明や成人病、がんや遺伝病の治療、新薬開発が世界中で進みつつあります。染色体は細胞が遺伝子を運ぶ担体であって、細胞が分裂する際に遺伝子を正確に伝達し、正確な遺伝子発現量と発現のタイミングを制御するメカニズムを備えています。したがって、安全に染色体そのものを操作し、改変し、障害を修復する技術が必要とされているのです。

将来のゴール

遺伝子や染色体を操作したり、細胞の分化再生能力を利用して、失った体の働きを再生、正常にします。これが機能再生医学です。21世紀の医学の主流となると考えられています。最近、病気の原因となっている変異遺伝子を補う遺伝子治療や、障害のある臓器や細胞の再生をおこなう再生医療に代表される遺伝子工学・発生工学の技術革新には目覚ましいものがあります。したがって、これまでの外科的治療や内科学的治療に加え、バイオテクノロジーの新技术をいかに機能再生医療に応用して行くかが社会的ニーズとして大きな課題となっています。

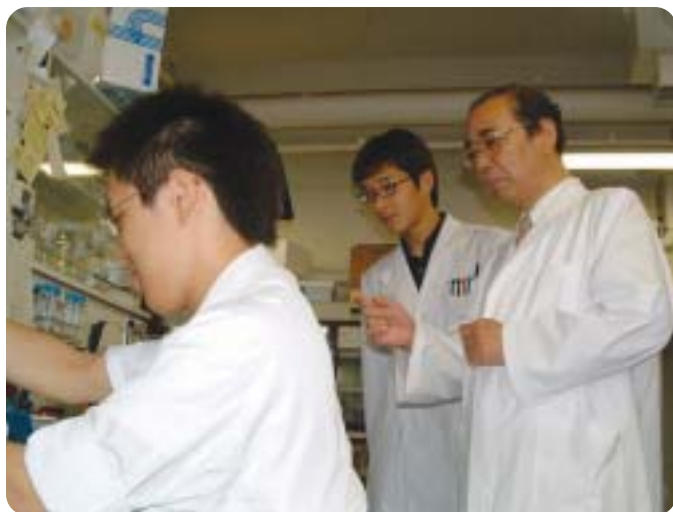
染色体工学技術とその将来



メンバー

プログラムの中心を担うのが鳥取大学大学院医学系研究科の機能再生医科学専攻と生命科学専攻です。機能再生医科学専攻は平成15年に開設され、「再生医療」について大学院で専門的な研究教育を行う専攻としては全国で2番目。また生命科学専攻は、平成2年に医学部としては全国で初めて本学に設置された生命科学科に併せて創設されたもので、その経緯からも先駆的な学術研究と教育が行われてきた実績が評価されてきました。8人の研究グループの代表者がそれぞれの実績で教育研究を行い社会貢献というゴールを目指しています。

- 押村 光雄 (機能再生医科学専攻・教授)
染色体改変技術の開発
 - 久郷 裕之 (機能再生医科学専攻・助教授)
細胞老化に関する研究
 - 栗政 明弘 (機能再生医科学専攻・助教授)
DNA損傷に関する研究
 - 富塚 一磨 (機能再生医科学専攻・客員教授)
疾患モデル動物作成・
医薬品開発のための動物の作成
 - 西川 光郎 (機能再生医科学専攻・客員教授)
血液幹細胞分化メカニズムの解明
 - 佐藤 建三 (生命科学科・教授)
遺伝子発現のメカニズムの解明
 - 林 眞一 (生命科学科・教授)
ES細胞分化メカニズムの研究
 - 井上 敏昭 (生命科学科・助教授)
細胞分裂の研究
- キリンビール医薬探索研究所 (連携研究所)



研究メンバー (右が押村教授)



研究メンバー

教育

その具体的実施計画として、国際的な共同研究の拠点となるオープンラボラトリーを開設し、共同研究のための旅費等の支援を行います。また、IT環境を利用した遠隔授業・集中講義・TVカンファレンスの充実を図り、センター内での高度の教育を推し進めます。また、国際レベルでの共同研究・技術開発を進展させるべく、交換留学・スタッフ交流の促進を行っていきます。さらに、海外研修の促進、海外への情報発信を積極的に推し進めていくため、国際シンポジウムを開催しています。



国際シンポジウム



附属病院における先端医療

鳥取大学医学部附属病院は昭和24年鳥取大学米子医科大学附属病院を前身としており、以来、山陰の医療を支え地域の期待と信頼を得ています。

平成16年の法人化にあたり、病院職員の、患者さまと健康を取り戻す喜びを共有したい、という熱い想いから基本理念を「健康の喜びの共有」と定めました。本院は特定機能病院として、また災害拠点病院としてその目的達成のために、地域医療及び高度な医療の提供によって地域の人々の期待に応えること、教育面では、優秀な医療人を養成して日本の医療の将来を支えること、そして研究面では、未知の領域に果敢に挑戦すること、この三つの使命を果たすために日夜たゆまぬ努力を行っています。

特に平成16年10月1日に設置した救命救急センターは、

鳥取県及び、米子市や県西部地域の市町村からの援助を受けて、24時間あらゆる領域の重篤な患者さまを受け入れる体制を整え、地域に根ざした高度な救命医療に貢献しています。

また、山陰で2例目の生体肝移植手術を行い、良好な結果を得ていることをはじめとして、平成17年1月1日には胸部外科を、同年4月1日には血液内科を開設、さらに最近では、眼科において屈折（近視）矯正手術を、皮膚科において美容外来を開設し、専門医による最新で安全な医療の追求を続けています。

このように、本院では地域の住民・患者さまを中心に据えた医療を実践し、今後も山陰のメディカルセンターとして、安心・安全を基本に高度な機能を維持しながら医療の提供を続けて参ります。



附属病院全景

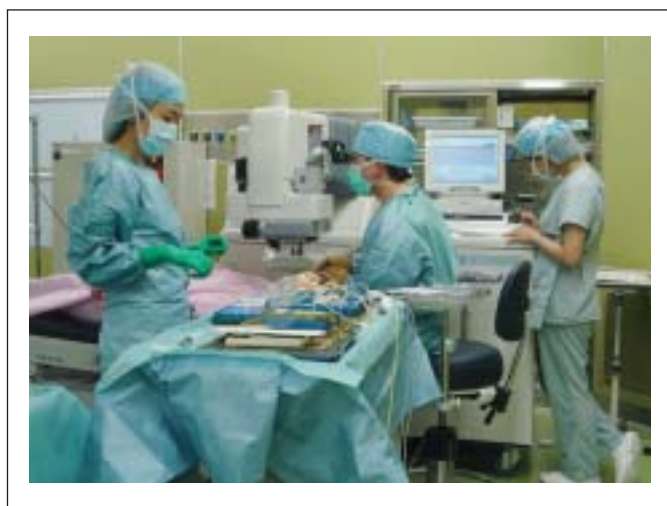


救命救急センター(病棟)



MRI装置

この装置は、脳のみならず頭部の血管も立体的に細部まで観ることができ、患者さまの負担をできるだけ少なくしながら世界最高レベルの画像診断を行っています。



エキシマレーザーによる屈折矯正手術風景

レーザーを用いて目のレンズにあたる角膜の形状を変える手術で、メガネ、コンタクトに変わる第三の視力矯正方法として注目を浴びている最先端の医療技術です。



全県カバー「ドクターヘリ」

医師や看護師が同乗して搬送中も傷病者の治療を行えるヘリコプターのことをそう呼んでいます。災害や事故によって、生命の危機に直面している人の、救命率の一層の向上を目的として、消防防災ヘリコプターを所有する鳥取県と本院が協定を結び、医師等が同乗できることになりました。



最新の人工心肺装置

附属病院へのお問い合わせ

医学部総務課広報係 TEL 0859-34-8363

HP <http://www.hosp.med.tottori-u.ac.jp/index.htm>

E-mail q010900@zim.tottori-u.ac.jp

速報

大学国際戦略本部強化事業採択

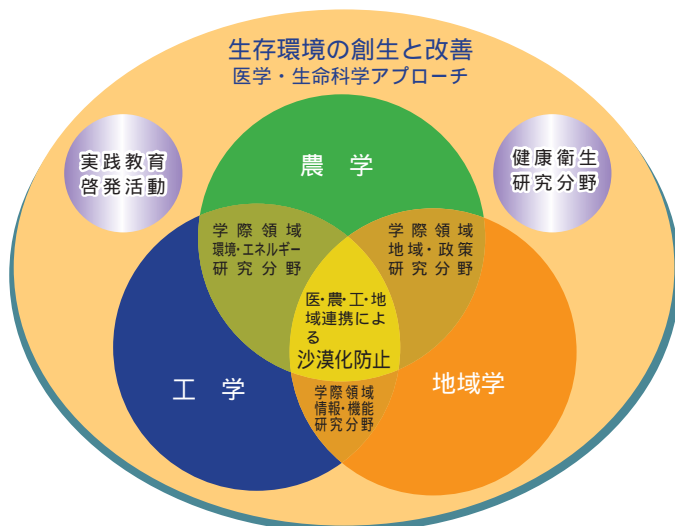
「大学国際戦略本部強化事業」は平成17年度から始まった文部科学省の新規事業です。この支援プログラムは、世界的研究・教育拠点を目指して、大学の国際戦略の下、学部横断的な組織体制を整備し、国際活動を組織的に推進するため

に公募されたものです。

このたび本学の、「持続性ある生存環境社会の構築に向けて - 沙漠化防止国際戦略 - 」事業が採択されました。

国際戦略概念図

持続性ある生存環境社会の構築に向けて
- 沙漠化防止国際戦略 -



得られる成果・達成目標

沙漠化は人口問題や環境問題など、地球規模で生じる多くの諸問題と密接に関係しており、その解決には、今後も長い期間が必要です。この沙漠化防止について、鳥取大学は国際戦略の一環として全学的な支援体制を構築して、先端的に取り組み、以下のような達成目標をかかげています。

沙漠化防止に係る研究対象地域の持続的且つ安定的な発展への提言

沙漠化防止に係る国際協力事業の遂行

国際的な教育・研究活動による人材育成

異なる生存環境に相応しい地域社会形成への提言

海外拠点と連携した国際情報ネットワークの構築

学術研究プロジェクトの加速度的進展

ダイズいろいろ

ダイズは煮豆、豆腐、味噌、醤油、納豆などの原料として、日本の食生活で必要不可欠であり、さらにイソフラボンなど多くの機能性をもつことがこのシリーズで紹介されました（風紋第9号、第10号）ので、ここではダイズの分化について紹介します。

ダイズは中華人民共和国の東北部に起源するとの説があり、ダイズの祖先種とされるツルマメは蔓生で、その黒い種子は扁平で1粒の重さが豆腐などに使われる白いダイズのおよそ4分の1で非常に小粒であります。ツルマメから進化したダイズは、日本に導入され、各地に伝播する過程で、栽培地、用途等により様々な品種が成立しています。

ダイズにもツルマメと同じ蔓生の無限伸育型、一定数の節に花芽を分化後伸長が停止する有限伸育型とそれらの中間型があります。無限伸育型は、生育温度があれば茎の伸長と着花を続け、開花順に種子が熟していき、種子が小さく、収穫した種子には未熟から完熟までいろいろな段階のものが含まれます。無限伸育型の品種は主として植物体が飼料作物として使用されていましたが、近年見かけ無くなりました。現在日本で栽培されているダイズは有限伸育型で、開花期間が短いため、成熟種子を一斉に収穫することができます。

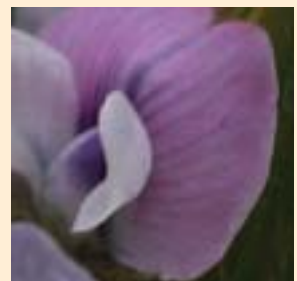
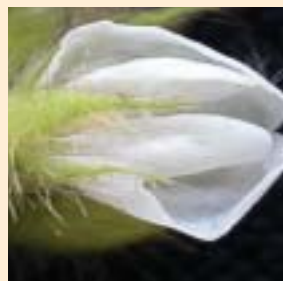
また、ダイズには日長に対する反応に変異があり、花芽形成に短日を必要とするものとしらないものがあります。花芽形成に短日が不必要な品種は夏ダイズと呼ばれ、4月に播種し、夏にその未熟種子をエダマメとして食べます。一方、短日を必要とする秋ダイズ品種は、4月の播種では植物体みの生長が進み、着花が少なくなる場合が多く、鳥取では6月中旬に播種します。日本ではダイズは水田の畦に栽培されることが多く、田植え後に播種し、イネの収穫前に収穫できる品種が選択されたために地域特有の品種が存在すると考えます。

品種の分化は種皮の色すなわちマメの色が最もわかりやすく、白、黄白色から赤、茶、緑、黒と色とりどり（写真1）、時には「鞍掛大豆」のように緑の地色に黒い大きな斑点が入ったものもあります。煮豆料理の代表格は、お正月のおせち料理の1品として欠かせない黒豆であります。黒豆は黒ダイズを甘く味つけたもので、大きなマメが喜ばれ、最も人気のあるのが大粒品種「丹波黒」を使用したものであります。一方、納豆は「納豆小粒」という品種があ



（写真 1）色とりどりのダイズ

るように小粒が好まれています。尚、黒ダイズも未熟種子すなわちエダマメで食べるときはほぼ緑で、成熟が進むにつれて品種独特の色に変わります。花の色もいろいろです（写真2）。



（写真 2）ダイズの花のいろいろ

最後に、鳥取県にはその食感から「もち大豆」と呼ばれる系統群が農家自身の種子採取により栽培が続けられています。同じ名前と呼ばれているが多種多様でDNAレベルでの分析で3グループに分類できる可能性が示唆されていますが、ただいま詳細に分析中です。

（農学部 中田 昇）

行動科学に基づいた健康習慣の獲得

定期健康診断（健診）の時期になりました。健診では結果を健康維持・増進に役立てるのが理想です。生活習慣を改変する必要性を感じる方も少なくないと思います。と同時に、その中には習慣改変の難しさを痛感している人もおられると思います。時間をかけて獲得・形成した生活習慣です。戦略をもって臨んでもなかなか1回ではうまく行かず、ましてやみくもに取り組んでも変わらないのはむしろ当然にも思えます。

最近、こうした生活習慣の改変方法の一つとして行動科学が用いられるようになってきています。行動の成り立ちに着目した行動科学的アプローチは、生活習慣改変に一役買いはじめています。教育・保健医学の教科書などにも取り上げられつつありますので御存知の方もおられると思いますが、今回は代表格の“変化のステージモデル”について紹介させていただきます。生活習慣改変が必要な場合、自らにこれを適応させると、自分の習慣に対する理解は深まり、上手に改変できるようになります。

変化のステージモデルでは、人の生活習慣（行動）は5つのステージ（時期）に分類され、これが変化するときには無関心期から維持期までを段階的に迎えると考えています。表と図から、自分がどの時期にあるのかを運動習慣を例に確認してみてください。

本モデルは、行動を変えるにはステージに見合った対応が求

められることを知るのに優れています（図）。例えば、ある病気で入院中にせっかく身につけた好ましい生活習慣も何か月か経つと元の木阿弥になってしまうことがあります。また、飲むべきお薬を定期的に飲めないこともあります。これらでは、本当は無関心期なのに、好ましい生活習慣を継続したりお薬を決まって飲んだりするという維持期の対応をなけば押し付けているため不具合になると考えられます。私自身、行動科学を学びはじめる以前は、こうした場合になぜできないのかと時に納得できずにいました。しかし、最近ではこの背景にステージの認識のずれがあることも見て取るようになりました。一般的には無関心に近い時期には考えや感情に対して、他方、維持に近い時期には実際の行動自体に焦点を当てていくとうまくいきます。無関心期では、健診データや諸種の健康情報を照合して健康意識を高揚し、生活習慣改変なき場合の健康への脅威を感情的に経験していくような働きかけの持続が有効です。維持期にはあらためてくどくどと意識に働きかけるより豊かな生活の質を確認したり激励したりすることの方が有効です。事実、当研究室では地域で行動科学に基づいた健康教室づくりに取り組んでいますが、従来型教室に比べ、食事・運動習慣改変率は向上しています。

（医学部 小谷 和彦）

あなたの行動ステージは？

無 関 心 期	6ヶ月以内に変えようとは思わない	行 動 期	行動を変えてから6ヶ月未満である
関 心 期	6ヶ月以内に変えようと考えている	維 持 期	行動を変えてから6ヶ月以上続いている
準 備 期	1ヶ月以内に変えようと考えている		

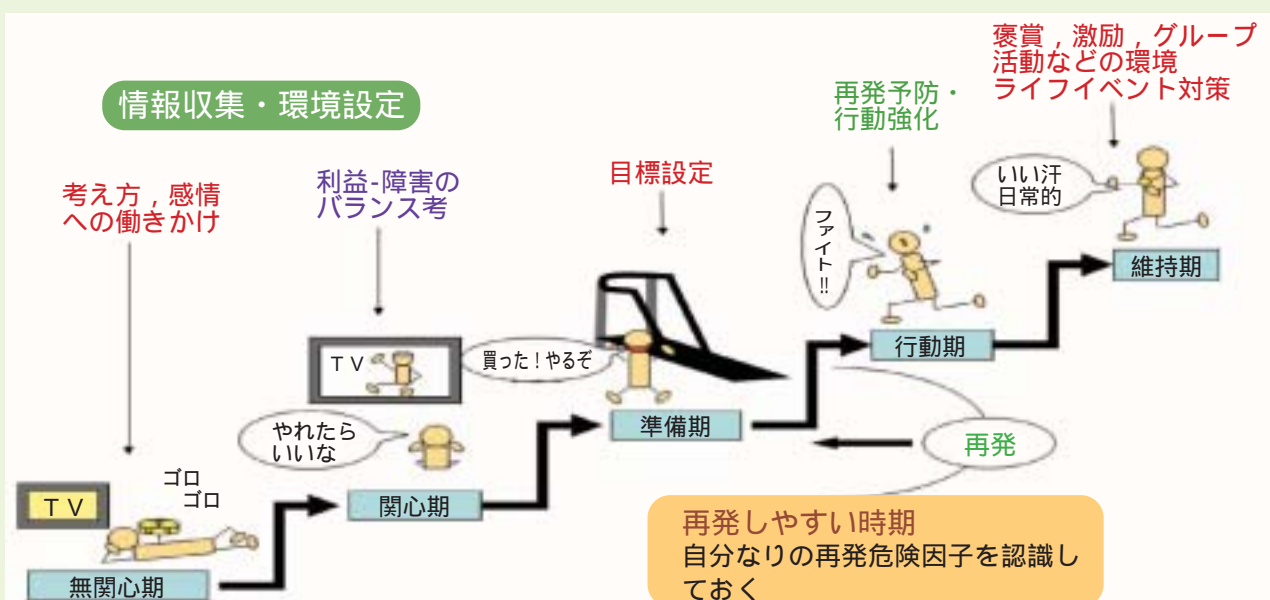


図 各ステージとアプローチのポイント

平成17年4月に農学部の附属センターとして

菌類きのこ遺伝資源研究センター

が設置されました。

菌類きのこ遺伝資源研究センターは、自然生態系の維持、植物の成長促進やストレス耐性の付与、環境汚染物質の浄化など多様な機能を持つ菌類きのこに関し、高レベルで特色のある体系的な教育と研究を進めています。さらに、鳥取県からの寄附部門の開設と（財）日本きのこセンター菌茸研究所との連携により、産業の活性化や新産業の創出を目指しています。



鳥取大学振興協会“談話室”設置

鳥取大学振興協会加盟企業の方々や鳥取大学で教員と懇談したり，企業同士の会合の場に利用していただくための“談話室”を地域共同研究センター内に新設しました。談話室は協会会員企業の皆様に開放しています。皆様のお越しをお待ちしております。



鳥取大学振興協会談話室の看板上掲式
右から能勢隆之鳥取大学長，米山幸太郎振興協会長，
岩崎正美産官学連携推進機構長

(平成17年6月13日)

産官学連携フェスティバル2005案内

鳥取県内で研究開発に携わっている研究者が一堂に会し，研究内容を紹介しあって，研究者同士のネットワークづくりを進める「産官学連携フェスティバル2005」を昨年に引き続き，今年も開催します。鳥取県内でどのような研究開発がなされているか，是非おいでください。

日時：平成17年11月17日（木）午後

場所：鳥取大学工学部（鳥取市湖山町南4丁目）



昨年度のポスタープレゼンテーション
（鳥取大学第1体育館）（平成16年11月12日）

鳥取大学発ベンチャーの紹介

大学での研究成果等を基に起業する，あるいは大学の教員や学生自らが起業する「鳥取大学発ベンチャー」について紹介します。

（有）内水面隼研究所 七條喜一郎氏（元農学部助教授）が設立。中山間地の休耕田を活用してコイ科の高級魚「ホンモロコ」を養殖し，地元農家に養殖技術を指導しながら，採卵と生魚の販売。

（有）SOMジャパン 徳高平蔵氏（元工学部教授）らが設立。指先から脈波をとり，わずか5分で血管年齢を診断する装置等の製造販売。

クロモセンター 押村光雄氏（医学系研究科教授）らが設立。染色体を主とした医学，生命工学および遺伝子工学などによる研究開発，遺伝子機能解析，医薬品等の安全性，効果等の受託業務



産官学連携推進会議(国立京都国際会館)で鳥大発ベンチャーの紹介をする鳥取大学ブース

（有）SOMジャパンが開発した血管年齢測定装置を使ったデモは多くの関心を集めました。(平成17年6月25日～26日)

産官学連携のお問い合わせ先

鳥取大学地域共同研究センター

TEL 0857-31-6707

FAX 0857-31-6708

E-mail jim@cjrd.tottori-u.ac.jp

HP <http://www.cjrd.tottori-u.ac.jp/>

お気軽におたずね下さい。

(地域共同研究センター 岡本 尚機)

平成17年度鳥取大学公開講座開講のご案内

講座名	受講対象者	実施時期
木炭やパステルによる素描実習講座	一般市民	10/18～11/22の毎週火曜日
コンピュータによる農業情報処理講座	農業指導機関職員及び農家	11/11～12/9の毎週金曜日
テニス教室	一般市民	9月～10月 日曜日を予定

詳細については、社会貢献推進課までお問い合わせ下さい。
TEL 0857-31-6777
Eメール kouken@zim.tottori-u.ac.jp

「まなびピアin鳥取大学」を開催!!

本年10月9日(日)～15日(土)までの7日間、「生涯学習を实践する場を全国的な規模で提供し、学習活動への参加を促進する」ことを目的として、鳥取県で第17回全国生涯学習フェスティバル「まなびピア鳥取2005」が開催されます。

本学も地域に開かれた「知の拠点」として、鳥取キャンパス、米子キャンパスを主会場に様々な参加事業を計画し、フェスティバルを盛り上げて行くこととしています。詳しくは、<http://www.tottori-u.ac.jp/manabipia/index.htm>をご覧ください。



編集後記

「はじめは、遺伝子病の治療を目的としていたが、最近のがんの治療にターゲットを変更しています。」とは、今回の特集・医学と医療現場の最前線で紹介した「21世紀COEプログラム・染色体工学技術の拠点形成」の代表者の押村教授が学生を前に話されたときの弁です。

なぜ、当初は対象を「遺伝子病」にしていたかということ、結婚して子どもができるかなっていつかだったので、生まれてくる子どもがなんらかの遺伝子異常を持っていたら治したいなあ、という気持ちからだったそうです。そして時が経ち、子どもは無事育ってくれて、今度は自分の健康が心配になり「がん治療」に方向変換した(笑い)ということでした。教授のユーモアの高さを表している話と受け取れますが、研究開発というものは元来、そのような日常のちょっとした思いつきや自分の周辺の切実な願いや夢から発生してくるものだという事は、よく耳にする話でもあります。21世紀COEプログラムなんていうと難しそうな実験室での研究をイメージされると思いますが、思いつきや願いのところは極めて単純で「砂漠でも作物を作りたい」とか「遺伝子が分かってきたのならそれで病気を治したい」ということなのです。鳥取大学では、これからも、地域と密着しながら切実な願いに応えていけるような研究開発をどんどん進めていきたいと考えています。いろいろとご意見ご相談をお願いします。

ところで、押村教授によると、寿命をコントロールしている遺伝子「テロメア遺伝子」が発見されて、だいたいヒトの寿命は120歳くらいが最長だと分かってきたそうです。教授は「まあ、俺は100歳くらいだなあ」と豪語されていましたが、さて、あなたは健康で長生きの目標は何歳ですか？

(医学部 加藤敏明)

鳥取大学の情報提供につきましては、ホームページで随時行っています。参考にしてください。

鳥取大学ホームページ

<http://www.tottori-u.ac.jp/index.html>

公開講座に関するホームページ

<http://www.tottori-u.ac.jp/contents/kouken/lecture/lecture.html>

新着・イベント情報

<http://www.tottori-u.ac.jp/contents/sintyaku/sintyaku.html>

サイエンス・アカデミーのご案内

地域共同研究センターでは、大学の研究成果や話題となっている問題等をわかりやすくお話しするサイエンス・アカデミーを、毎月原則として第2、4土曜日に開催しています。受講料は無料でご参加いただけます。

詳細はセンター事務室までお問い合わせください。

TEL 0857-31-6707

Eメール jim@cjrd.tottori-u.ac.jp

鳥取大学広報誌「風紋」(第11号)

平成17年9月発行

編集発行 鳥取大学広報委員会広報誌編集専門委員会

福井 茂 壽(委員長:工学部副学部長)

内藤 久子(地域学部)

加藤 敏 暁(医学部)

山見 吉 暁(工学部)

山口 武 視(農学部)

岡本 尚 機(地域共同研究センター)

田中 耕 司(企画調整課)

住所 〒680-8550 鳥取市湖山町南4-101

TEL 0857-31-5750

FAX 0857-31-5797

E-mail fumon@zim.tottori-u.ac.jp

ホームページ <http://www.tottori-u.ac.jp>